

小田原史談

第 28 号
発行所 小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一丁目七番
電話小田原三四七七番



箱根路入生田の初雪附近

あは雪のほろほろに降りしけは奈良の
都し思ほゆるかも (万葉集)

崩れゆく美

井上康文

標の梢で光りが囁く
光りははらはらとこぼれ
地上の花は音もなく散る
音もなく崩れてゆく美を
追ひかけてゆく情熱
今日 生れ 生き
今日 死に 滅び
遂ひ そして別れ
時の流れの中に消え去り
死に絶えてゆくもののみが
美しく
思ひ出は 影をひいて
永遠につながる
(詩集「天の糸」に収む
一九五〇年十月作)

崩れゆく美について

故 吉川英治氏の書簡

井上康文様 六月十四日

侍史

吉川 英治

拝けい 御詩集「天の糸」御慮とに預り ありがたう御座いました。ずいぶんお忙しく、ずいぶん御過勞だろ
うと察せられるのに、依然 詩心をお失ひなき君に 心
から敬意と御祝福をささげます。

が跋語を拝見すると、こ幼少からお弱かった君が、近年
まったくお丈夫なのは、その俗務のたまものでも知れま
せん。そしてその中から生れる詩が、いよいよ、大兄の
ほんとの詩になるのかもしれないね。
集中「崩れゆく美」を拝誦して、ふと、エンメイのさい
ごの「瞬のいちらしい姿を想ひよばれました。あの日、
奈良にをりましたので古都の諸仏に、心ひそかに崩れゆ
く美の一片であった彼に、冥福を祈ってをりました。御
礼までを、齋翠目ざしのあつさ、愈々御自愛を 拝具
この手紙は原稿用紙一枚に万年筆でいねいに書かれ
たもので、封筒には品川区北品川四ノ七四〇 吉川英治
とあり、昭和三十一年六月十六日の消印が押されてある
六月初めにわたした私の詩集「天の糸」をお送りして、間
もなく頂いたものである。

吉川氏があの大きな仕事と取り組んで、忙しい日を送
っている中で、送られてきた詩集を読み、しかも最後の
跋文まで読んで礼状を書くということは並大抵のことでは
なく、その誠実さと、詩に対する深い理解を、私はじ
かにうけとって嬉しかったこの年のダービーで吉川氏の
愛馬エンメイが事故のために倒れ死んだか、私の「崩れ
ゆく美」という詩を読んで、エンメイはかない運命を
嘆かれたのである。詩は「音もなく崩れゆく美を追ふ情
熱、死に絶えてゆくもののみが美しく、思ひ出は永遠に
つながる」と歌ったもので、この詩が、いまは吉川氏を想
い偲ぶものとなってしまった。
井上康文誌

早春

楚囚の詩

三月の空にうつうつと星こ
もり湯の匂する母子ゆきたり
山下 陸奥
奥武蔵の知れる山々を春山
と眼にあがきつつ今宵たの
しも 半田 良平
朝あけて雪積るはふ信濃
路に春の来向ふ木浅葱空
謝沢 古実
枝白き木立を行きぬ散りし
ける落葉の下の春の息づき
近藤 芳美
崩ゆるものなべて幼く春の
日の光りのなかに粉るもの
あり 吉植 庄亭
くち土をもたけて光る霜柱
水仙の青芽のそかせており
生田 蝶介

それから十日後に、また
また東京で一冊取引された
現存数部といわれている本
だけに話題になっている。
(週聞文巻)

実話

一宮尊徳と

古屋キノと言う人

井上 英一

明治三十七年十二月一日
八十二才の高齢を以て長壽
を完うせられた古屋キノ女
は西栢山三、三二番地古
屋家三代目古屋藤蔵の妻で
ありまして、現当主六代古
屋安好氏の宗祖母に当りま
す。

その宗祖母の賢婦人にあ
やかるようにと孫の新太郎
の弟角蔵に娘の生れるや、
名をキノと付けられたのだ
と私は伺っております。即
ち現在養子である角次郎氏
の妻がそれです。
処で筆者が先代のキノ女
史から直接聞き及んでおり
ます。

「実在の二宮尊徳を拝んだ
事がある」
と言う実話なのです。
これは誠に得難く、しか
も尊い史秘でありまして、
現代の人々はおよそ想像も
出来兼ねる事だと思つてお
す。

何故なら二宮金次郎と言
えは遠い遠い昔の偉人であ
ると誰れもが思っているか
ら。
然しそうでなく、余りに
も身近な時代の人物であつ
た事を、私共は今更らなが
ら感銘して止みません。
以下順を追って書くこと
に致します。

明治三十七年キノ女子が
歿せられたのが、筆者の七
才の時でした。今から丁度
五十九年前、其の時代に伺
つた話故、うす覚えの箇所
もあるところから裏付けの
必要があるのです。

「尊徳翁六十年祭」が桜井
村(当時は足柄上郡桜井村
と称す)あげて盛大に挙行
せられ、それが筆者が小田
原中学校に在学中の十九才
であった。

古屋家では藤蔵・キノの
夫妻の次の代即ち広吉・キ
ノそれから新太郎・フジの
時代となる。
其のフジ女から先程の私
幼少の頃「キノ女史から聞
いた話」の裏付けをして頂
きましたので、これで確か
なので、世間に発表しても
差支えないものと自信を得
た次第である。

「足柄平野の田圃という田
圃は今や黄金の花ざかり、
今年もどうやら豊作らしい
ぞ」
農家にとってはこれ程う
れしい事はない。そしてあ
つい夏も去り、少し冷い風
が朝夕吹き始めた今日この
頃である。
秋の刈取りまではここ当
分間があり、骨休みも出来

ると言うものだ。
ところで今日は彼岸の中
日でもあるのであらう。
各家庭では香の花やそれ
ぞれの御供物をブラさげて
お寺に先祖の墓参りにと出
かける人々で賑う。

時は天保六年の秋、キノ
女が十三才の頃である。
桜町の事業も無事終り、
又青木村も目出度く救済出
来、その上数々の仕法も成
功したので、天下に「二宮
尊徳にあり」と称せられ
る様になつた二宮金次郎を
一目見んものと、村中女も
男も老も若きも総出で出迎
えする事となつた。
やがて警ヒツの声が富水部
落のはずれから聞えて来る
皆んなは道端の両側に並
んで土下座し、顔もあげら
れない。

そのうちに自分の真前迄
来たらしい。
「三郎左エ門! (弟幼名友
吉) 久々の墓参りだろ。村
善栄寺はもう直ぐだぞ。村
の衆がみんな出て迎えてく
れる。なんと有難い事だろ
う」
とでも言っておられるだ
らうか、何やら二人で言葉
のやり取りをして居られる
気配がする。

自分はソツと盗み見して
先生の横姿を拝む。見れば
二本の大小の太刀を腰に差
し、立派な上下を着たお武
家さんは、昔の金次郎どん
とは思えない。
それに昔なつかしい友達
や知人に敬意を表する意味
でか、ニコニコと愛想よく

通過されたのであります。
お駕籠から降りて歩くな
らうか。夢の様にした。無
意識のうちに自然と頭が下
らつて来る。ああ偉らくなつ
たもんだナ!

これがキノ女史の話でし
た。
その逸話を私が筆にして
昭和三十七年十二月一日発
行の「我が故郷」に記して
ありますが、ここでは話を
まとめる必要が再録する
事にしよう。

「飲んでおいしい水、飲ん
で薬になる水、地区に数多
くの長寿者が現存しておら
れるのを見ると、不老不死
の地としてウベなるかなで
ある。
ところで豊聖二宮金次郎
はこの香り高い豊かな天恵
の地に生れたのだ。
即ち大自然の前に人類の
試金石として与えられた聖
神に外ならない。

同志! 我々は尊徳を守
護神と敬し、子々孫々に到
るまで、其の徳を偲びつつ
後につづいて行こうではあ
りませんか。
金次郎が十五才の夏のあ
る日近所の友達と五、六人
連れだつて富士登山をした
時の話。
頂上の井戸金明水を見て
友達の一人は言った「金さ
ん! こんな高い処で水が出
るとは全く不思議じゃない
か」金次郎曰く「何も不思議
な事はないよ、Aちゃん
お前の頭のとっぺんに釘を
打ち込んでみる、血がぶき

出すだらう。それと同じ理
屈だよ」
Aさんは判つた様な、判
らない様な話なので、帰宅
後よく物の原理を教えたも
らつて、初めて納得したと
いうのである。
(二宮尊徳翁百八年墓前祭
の日昭和三十八年九月二
十日、但し命日は十月二
十日なるも農繁期に当る
故一ヶ月前に繰上ぐ)
備考・年表左の通り

年代	皇紀	二宮金次郎	古屋キノ	備考
天明7年	2448年	7月23日生	—	
文政6年	2482年	37才	1才 11月13日生	
天保6年	2495年	49才	13才	
安政3年	2516年	10月20日歿 70才	34才	
明治37年	2564年	—	12月1日歿 82才	井上英一 7才

酒は微酔
花は半開

貝原益軒「菜訓」より
酒は天の美祿なり。少し
飲めば、心を寛くし、憂を
消し、興をやり、元気を補
い、血気をめぐらし、人と
飲を合せ、薬を助けて、そ
の益多し。もし多く飲ん
酩酊すれば、人の見る目も
見苦しく、言もおく妄りに
語り、すがたも常にかわり
て慎みなく、心あらくして
狂するが如し。故人これを
狂薬といへるむべなり。そ
のうへ病を生じて、くすし
がたく、大なるわざはひと
なる。若きときより多飲を
いましめざれば、習ひてく
せとなる。うらめし。これ
を以て古語に、酒は微酔に
飲み、花は半開に見るとい
へり。酒を飲まば微酔を限
りとして、薬を失なはざる
べし。ほしいままに飲んで
苦を求むべからず。天の美
祿として、薬を生ずるため
たきものなるを以て、かへ
つて狂薬として大なる禍ひ
をなして憂を生ずるは、惜
げのことなり。

一、おもしろの秋雨や
葉のちらぬほど
一、おもしろの酒宴や
本心を失はぬほど
小阜川隆景壁書より

生麥事件余話

蓑田長平

作家井上友一郎先生の私説生麥事件「秘められた武士道」は、文久二年八月薩藩主島津久光が江戸を出発して歸藩の途中、武州生麥において行列を犯した英人一人を斬り二人を傷つけ、婦人一人だけとなきを得た事件を取りあげて書いたもので、下手人は岡野新助という足軽で、事態面倒とみた薩藩では、この男を逃亡させる。のち新助は薩藩への復帰を切望するが許されず或は刺客となつて働いたり或は反対に近藤勇らの新選組に投じて、とどのつまりは、落ち目の新選組に従つて甲州街道や流山で、官軍に抗戦するという不運な武士の数寄な生涯を面白く書いたものである。

さてこの岡野新助という名前は井上氏が勝手にでっちあげたものかというところ、そうでない。史実を調べてみると、確に事件の張本人として、薩藩でつくりあげた、まったくの架空人物である。

この史実の真相について私の友人である郷土史実家平原勝郎氏は私に私信をもつて次の如く説かれてきた作家などというものは、一寸常人の思い及ばぬ人物をひきだして、実に奇想天外な筋をつくるものだ、あらためて感心した次第であるが、この岡野新助なる幽霊人物が、生れてきたいきさつはこうである。

世間識者のなかには、生麥事件を当時攘夷の熱が烈しかった薩藩の連中が、西洋人が無礼でもしたら斬つて捨てたいと、かねてその機会をねらっていたとか、或は幕府を窮地に陥れたために、久光公が使嗾したとか、または外字紙の報道などには、久光公が直接指揮をとつたなどと、でたらめを書いておる。

文久二年五月、勅使大原重徳卿に従つて江戸に出た久光は、西洋人が列を組んで歩いたり、騎馬で市中を乗り廻すので、途中でもし異国人が無礼をするようなことがあつては、大概なこ

とまでは勘弁するが、甚しい場合は相当の処置に出るから、幕府の方でもお取締を願いたい、同時に外国の公使領事に対してもさうご照会をお願いするということを、六月二十三日に薩藩から幕府に申出でていたのである。これに対して幕府は翌月、言語風俗も違つていふことだから成るべく穩便にせよ、もしそのためいろいろ面倒なことが起ると、わが日本としても容易ならぬことであるから慎重にしてもらいたいと回答している。

生麥事件が江戸に聞える

と、幕府の驚きは一通りではない。閑老達はみな色を失つた。なにしろ国家の安危に係る重大事であるからなかに兵を出して久光の上洛を阻止し加害者を差出させよとか、江戸に召還して事件の落着を待たせよとか、かねえの沸くかごとき有様であるが、当時既に幕府の威信は地に落ちていたから、いかんともするところが出来ず、固章狼狽するほかはなかった。

幕府の外国奉行阿部正外は、直ちに支配組頭の若菜

三男三郎を程ヶ谷の宿舎に遣して、久光に事件落着かすまで、そこに滞在すべき旨を伝えたが、久光はこれを一蹴してしまつた。そこで阿部は更に小田原藩に命じて、箱根の関所を鎖して久光の行列を阻止することにした。

この事件のあつた翌二十一日に別に外人の襲撃もなかつたので、久光は程ヶ谷を出発、威風堂々と行列をつくつて西下の途についたそれを聞いた幕府側は唇を噛んで口惜しがつたが、何んとしても手の下しようがなく、小田原藩に命じて箱根の関所をさし、通行を阻止しようとしても、威信地に落ちた幕府は薩藩の威力を抑制する力もなく、久光は悠々と関所を通り過ぎた。

もつとも久光は程ヶ谷出発に先だち、家臣国分市十郎を使者として事件を神奈川奉行に報告せしめ、一方江戸留守居役の西筑右衛門をして、二十五日に閑老に事情を開陳せしめたが、その内容は「今回の事件は自分の家来どもがしたことではない。どこか不明の浪人が斬付けて追っかけていっ

たもので、島津藩とは何等関り合ひのないものである」と、しらじらしい嘘をついて報告したのである。

ところが、あとで余りにでたらめな申開きだと思つたのであろう。次にはこの発言を取消して「じつは足軽の岡野新助という者が斬つて逃げ、その行衛は分らぬ」と報告の焼き直しをやつたのである。もちろんこの岡野新助の名は誰がつけたものか判らないが、当座の口から出まかせの架空の人物なのである。薩藩から二度目の使者を出して、神奈川奉行に、最初の報告書の返還方を申込んだとき、奉行所の阿部豊後守は仲々承知せず、その申込みを拒絶したので、外国係の水野和泉守忠精に進達せられたのは最初の報告書であつた。

この事件後、英国側は屢々幕府に対して加害者の処刑を迫るので、当の薩藩では「加害者岡野新助は失踪以来、いままお所在が判らぬ。然しきつと搜索逮捕するから、暫くご猶予を願う」ということで、その場をにごしていろいろうちに、文久三年七月の薩英戦争が勃発したのであつた。

この架空の人物岡野新助が、百年後の今日、作家の井上氏に発見されて活躍しようとは。

文苑

元且偶成

柴門無俗客。屋静似山居。閑把兩華說。春風滿太虛。甲辰元且

清水專吉郎

元朝靜寂白東端。旭光遙輝照全身。若竹凌軒意氣高。天宮滿達辰年春。

浅年生れの八十四歳を迎えて 蓑田 長平

辰歳もこれが最後と思うときうれしきなかにも悲しみの湧く

勅題 紙 杉山 康輔

結局は紙一重なる鮮釈に糸理つくしわが正しきを説く(ある税務立会にて)

浅井久美子

風吹ける真昼日の冬波柿に砂塵移りて鈍く光りをり

乳色の雲深ひて陽の遠し標の梢に百舌の高啼く

名儀変更の登記もいまだ済みならず年々繕ひの多くなる我家

雑報

辰年に因む

たつ展

七名出席、伊豆史談会の鳥羽山専務はじめ会員の懇切なる幹旋により和やかな会合裡に終始し、中野敬次郎氏の北条早雲についての有益なる講演あり、一泊の上翌日は附近の史蹟めぐりを為し午后三時過散会した。

編集後記

一月七日より三十一日まで郷土文化館において竜にちなんだ書画・陶器銅器の置物・瓶・木彫・刺繍・刀剣・玩具類等新古合せて約百五十点の展覧会が開かれた。さすがに古来民衆に親しまれた種だけに珍品も少くなく、来観者の目を楽しませた。出品は大体個人の愛蔵品、寺院の什器等を借り出したもので、これが収集に当たった史談会員の労を多とする。来観者は毎日五百人内外にてきわめて有意義に終った。

新年会

一月二十日夕六時より窓梅会館において史談会員の新年会開催、来会二十七名半鍋を突つき合い相互胸襟を開いて懇談裡に九時散会した。

豆相史談会

予報の通り豆相史談会は一月二十五日午後五時より伊豆韮山温泉真珠院において開催、当史談会より二十

▲輝かしい辰年を迎えてはやくも一月を過ぎて立春に入りました。余寒は当分続きましようが、梅も満開で一日毎に春光に向うことを思えば元氣もわきたちます活躍の歳として期待したこの一年を悔いなくおくりたいものです。
▲本月号は在京の小田原出身の詩人井上康文先生の厚意により送っていただいた「崩れゆく美」を巻頭にかざりましたが、来月は同じく郷里の生んだ鬼才児北村透谷を主題として編集する予定です。偉大なる作品を世に残して、僅かに二十七歳で世を去ったその波瀾に富んだ生涯を偲びたいと思えます。
▲本年秋はわが国でオリンピック大会が開かれ、国民の血を湧き立たせました。

各国より集まる外人中には郷土文化に興味を持ち、天守閣とともに文化館を訪れる人もあろうかと思えます。史談会ではこれに對して備うるところがなければならぬと思いますがいかがでしょうか。よく御考え置きを願います。
▲インフルエンザが流行しておるようです。皆さまのご健康を御祈り申します。

小田原信用金庫

小田原市幸1の179 (電話(0465)23121)

理事長 鈴木十郎

十字町支店:(電話)5121代)
 緑町支店(電話)5124代)
 湯本町支店(電話箱根)5518-9)
 国府津支店(電話)42191-2)
 鴨宮支店(電話)42138代)

御料理 仕出し
御弁当

株式会社 東華軒

代表取締役 飯沼相三郎

小田原駅前
TEL (0465) 5061-2

楽しい生活

明るい読書

八小堂

小田原駅前 TEL5388-9

志澤

TEL3131

セトモノの御用は
(陶磁器・陶管・植木鉢)

大川商店

TEL8513・3055

浄化槽の清掃修理

小田原市緑1の47

小田原衛生株式会社

電話25861・2468番

取締役社長 鈴木浩

電気工事一式・設計・請負
販売修理

兵藤電気商会

小田原市下曾我駅前
電話国府津(4)3578番

各種竹製品製造卸
干梅 発売元

中島観光物産商会

小田原市幸3~485
TEL 5019

日本銘菓指定店
神奈川県指店銘菓店

山口菓子舗

井細田店
小田原駅前店 TEL2215
箱根湯本店 // 5641

報徳証券株式会社

小田原市幸1~162
電話(2)6128(代)
7537

利殖の早途は証券投資から
安全確実な利殖投資